

昭和九年（一九三四） 絹本着色
本紙二二・八×六三・三



本図は、高野山の根本大塔の本尊、大日如来像を描いたもので、弘法大師千百年御遠忌を記念した大塔再建にあわせて木村武山（一八七六―一九四二）が描き、皇室へ献上したという伝来をもつ。これについて『塔影』（第十巻六号、昭和九年六月）には、「：豫てより木村武山がその依頼を受けて謹作中であつたが四月末その完成を見た。畫は二尺に四尺五寸の縦幅で五月四日高野山で開眼供養を行つて後直ちに献上の手續をとつた。」と記されている。金色の彫像を拝観した上で、武山のイメージによる大日如来を、他の仏画や曼荼羅等を参考に構図や賦彩を考えたのである。彫像よりも柔和で気品ある姿に描かれる。如来像、台座、光背はいたって伝統的な密教図像に基づく。区画の四隅には羯磨を置き、外周に三鈷杵、その内側に輪宝を裝飾的に連ねる。大日如来の肉身には裏彩色を施し、衣には平安仏画に見られる細緻な截金による裝飾文

様を意識して金泥の細線で丁寧な文様を施す。区画の上下には左右四方に蓮華を挿す華瓶を置く点も、曼荼羅を意識し、この上下の部分には裏箔が施されている。また、暈網彩色や隈取りなどの描法、彩色を用いる点においても伝統的な仏画に倣っている。このように伝統性の強い仏画であるが、本来の密教画のような原色を基調とする濃厚鮮麗な色調ではなく、全てが中間色の優しい色調で統一されている点に、色彩感覚に優れた武山の特色が看出来よう。

木村武山は、川端玉章に師事した後、東京美術学校で学ぶ。岡倉天心が率いる日本絵画協会に参加し、日本美術院創立に際しては副員となり、美術院の五浦移転においては天心や大観等と行動を共にした。優れた写實的描写力と古典を学んで培った豊かな素養によって生み出された作品は、当時から高い評価を得た。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生 — 作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 72

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzokan